

復元ドキュメント

伝今泉出土銀装大刀

香芝市今泉から出土した古代刀「伝今泉出土銀装大刀」は、
古代大和と東国の交流を知る上で極めて貴重な考古資料。

その復元品が、平成10年に完成しました。

復元までの過程やその意義についてレポートします。



生み出された名刀は、刀工が燃やし続けた技と心の結晶です

東国と大和の活発な 政治的交流を実証

香芝市今泉の寺地家所有の丘陵から「伝今泉出土銀装大刀」が採集されたのは、戦後間もない昭和二十一年十一月のことです。一緒に出土した土器類から、この大刀は飛鳥時代（七世紀中頃）に製作されたものではないかと推定されます。

伝今泉出土銀装大刀は長く寺地家で丁寧に保管されていましたが、平成七年に寺地平一氏から香芝市二上山博物館に寄贈されました。同博物館と香芝市文化財保護審議会での入念な調査の結果、この大刀は七世紀の古代大和と東国の政治的な関係を考察する上で極めて貴重な考古資料であることが判明、平成八年度「香芝市指定文化財」の指定を受けました。

その後、大刀実物には腐食・劣化防止のための保存処理が施されるとともに、刀匠の河内國平氏、美術刀剣鞘師の高山一之氏、美術刀剣白銀師の中田育男氏の三氏に依頼して復元模造品（美術刀剣）が製作されることになりました。

伝今泉出土銀装大刀は全長六十六㎝、刀の幅二・八㎝、刀身の長さは五十八・五㎝で、刀全体の重さは〇・七㎏。鞘口金具の下端に鑲付足金物（薄くて細長い板状金具の一端に耳環状の円環を巻き込んだ金具）が付けられているのが大きな特徴です。



末永雅雄教授による鑑定書(二上山博物館)



赤々と燃える炎。それより熱い刀工の魂

謎に包まれた 伝今泉出土銀装大刀

製作後千三百年以上も経過しているため刀身部分は鉄錆によって腐食・欠失していました。幸い、銀装が施された鞘口金具や鑲付足金物、貴金具は比較的良好に遺存していました。復元模造品はこうしたわずかなヒントを手がかりに製作されたのです。

東吉野村にある河内國平氏の工房を訪ねました。河内氏は藤ノ木古墳出土の玉纏大刀や島根県安来市高広横穴墓出土の大刀など、西日本一帯の古代刀剣を数多く手がけてきたこの道の第一人者です。

「古代刀剣の製作技術に関する研究はようやく始まったばかりで、素材をはじめ冶金や使用方法もまだほとんど解明されていません。焼きがどのぐらい入っているのか、いや果たして焼きを入れているのかどうかさえ分からない。しかも伝今泉出土銀装大刀は地金が極めて少なかつたため、まさに手探りで進めるしかない状況でした」という話からも、復元の難しさが推察できます。

特に苦労されたのが鉄の鍛練だそうです。伝今泉出土銀装大刀は地金がガサガサしているのが特徴の一つですが、そうした持ち味をごく自然に再現しなければならぬからです。鋼に含まれる炭素の量、温度のかけ方、鍛練の回数など

にも独自の工夫が凝らされました。

「あの金具の製作は非常に高度な技術を要するのですが、そんなものを七世紀の刀工たちが作っていたのには驚きました。そのように、古代刀剣を復元していると興味深いことがつきつきに出てきます。この世界が発達しなければ日本の鉄文化を解明することはできないわけですから、こんな仕事をさせてもらうのはありがたいことだと思っています」

古代刀剣の出土は少なく、復元された大刀の数もまだほんのわずか。環付足金物を有する型式の大刀としては初めての復元模造品となる伝今泉出土銀装大刀の復元は、古代刀剣の技術解明にも大きな手掛かりとなりそうです。

代々大切に保管してきた大刀を、 後世に長く伝えたい

寺地平一さんに聞く

大刀の発見後、ある郷土史家の方を通じて末永雅雄先生(関西大学名誉教授、文化勲章受章)に鑑定していただいたところ、「考古学的に極めて貴重な資料ですから大事に保管してください」と言われました。驚くと同時に所有者として大事に扱わなくてはならないと思い、父親の代から四十七年間に丁重に保管してきました。その後、一人でも多くの人に見ていただきたいと思って香芝市二上山博物館に寄贈したわけですが、その大刀がこれほど見事に復元されたことに感激しています。これからも末長く大切に保管されることを願っています。

<一口×モ>

1. 刀剣には反りが付いている「湾刀」と、反りのない「直刀」がある。湾刀は平安時代末期以後に作られたもので、日本刀とはこの湾刀を指す。直刀はそれ以前に作られたもので、これは古代刀と呼ぶ。
2. 刀剣の製作には非常に複雑かつ多くの工程を要する。まず砂鉄から刃金を作り、それを火床の中へ入れて加熱し、何度も鍛練する。その後地鉄を取り出して向こう槌で鍛えていく。



鋭打つ響きは刀工と鉄の語り